

教職大学院生を想定した教育実習日誌の分析結果とその可視化の検討 ——OpenPNE を援用した実習日誌の分析結果を星座グラフに表示して——

A Study of Visualizing Results Based on Analyzing Contents of Report by Model Students in Professional Activities in Schools ; Presenting the Analyzed Results with Constellation Charts

稲田佳彦 住野好久 高橋香代 橋ヶ谷佳正 小山朝子 泊直希 近藤勲
Y. Inada Y. Sumino K. Takahashi Y. Hashigaya A. Koyama N. Tomari I. Kondoh

岡山大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Okayama University

[要約]本研究は教育実践と理論の往還・融合を重視する教職大学院のカリキュラムの一環として、学部新卒者を想定し設定した授業科目「学校における教育実習（課題発見）」と「教育実践研究Ⅰ」の有効性を検証するために、発足に先駆けてモデル学生を教育実習校へ派遣して実施したシミュレーションの結果をまとめた報告である。

[キーワード] 教職大学院教育 カリキュラム開発 SNS システム開発 星座グラフ

1. 本研究の契機と経緯

平成 20 年 4 月に全国一斉に教職大学院 19 大学が発足した。その中の一つである岡山大学は、平成 19 年度に同大学院の設置申請を行う一方「文科省専門職大学院等教育推進プログラム」（以後、教職 GP という）を申請し、採択された。同大学院の設置趣旨は、多角的視野を持って今日的教育課題解決に向けた実践力とリーダーの資質を備えた高度職業人の育成であるが、本教職 GP では学部新卒者に教育課題発見を促し、その課題解決に向けた実践力の育成を図るカリキュラムの開発をめざした。

2. 本研究の必要性和概要

本教職大学院の設置趣旨の具現化に向けて体系づけたカリキュラムの開発を行ったが、入学定員 20 名の内、教職経験者と教職未経験の学部新卒者はそれぞれ 10 名を予定していた。後者に対しては、教育課題を発見しそれを自己課題として認識した上で課題解決に向けた実践力を想定どおり育成できるか否かを検証する必要があった。

このため、本研究では図 1 に示すように学部新卒者を対象に設定した授業科目「学校における実習（課題発見）」の実施に当たり、院生の学校現場への適応行動と課題発見の意識・意欲の変化・変遷を事前に調査・分析し、その結果を知見としてまとめた。

3. 実施方法

3.1. 関係諸機関への事前の準備

- ①協力者 想定される学部新卒者として、学部 4 年生 3 名(男 1 名, 女 2 名), 院生 1 年次生 1 名 (女) の計 4 名
- ②派遣先 O 市立地域協働学校 4 校. 内訳は小学校 3 校, 中学校 1 校の計 4 校. 地域協働学校とは O 市教育委員会が学校と家庭と地域の連携強化を目指したプロジェクトの研究指定校.
- ③実施期間 '08 年 1 月 8 日~同 2 月 28 日. 一人毎週 1 回 1 日中地域協働学校へ派遣.
- ④事前準備 県教委には現職教員の派遣を, また, O 市教委には教育実習の受け入れを要請し, 協力の確約を得た.

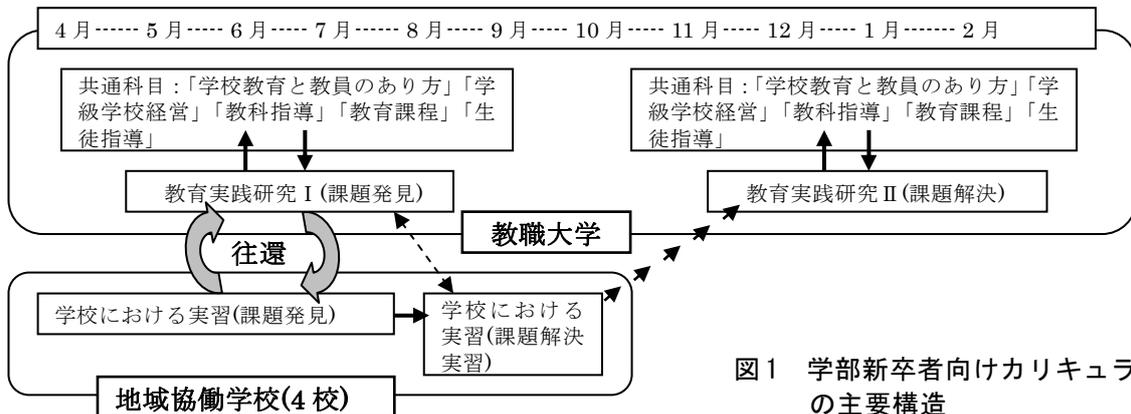


図 1 学部新卒者向けカリキュラムの主要構造

3.2. 情報収集の方法

「学校における実習（課題発見）」の受講において、その体験を帰した日記あるいはそれを省察したレポートを特定のコミュニティ、例えば、受講生と授業担当教員で構成される講義別コミュニティに投稿すると、構成メンバーが相互にそれを閲覧しコメントなどを投稿できる。本研究では、SNSの一つである mixi のような機能を持った専用システム「こらみゆ」を OpenPNE のカスタマイズによって構築し、協力者である 4 名の学生（以後、モデル学生という）に使わせた。図 2 が「こらみゆ」の一事例である。

4. 分析及び表示方法

4.1. 分析と集計の方法

4 名のモデル学生のそれぞれの実習日誌は「こらみゆ」に投稿された。それを本大学院専任予定教員並びに新たに学内に設置された教職コラボレーションセンター教職員が閲覧し、教示的あるいは激励的なコメントを投稿した。それをモデル学生が閲覧し再投稿するというインタラクティブ性も多見された。

本研究では、モデル学生からの実習日誌の記述内容を「学校と教員のあり方」「学級・学校経営」「教科指導」「教育課程」「生徒指導」の 5 領域に分けて、該当する出現頻度を計数した。また、自由記述された内容については 5 領域に弁別し、「再認的な内容」「発見的な内容」「自己変容的な内容」の 3 段階に弁別し、それぞれ 0.5, 1.0, 2.0 という重み付けを行って 5 領域の件数に加算した。

4.2. 表示方法

前項で述べた集計結果をもとに一瞥性に優れたグラフ化を図るため、順序尺度や名義尺度のデータの多次元表現に優れている星座グラフを採用した。星座グラフのベクトルの算出には、表 1 に示す計算式を創案して適用した。図 3 が得られた星座グラフの事例である。

5. 考察

星座グラフを描くことによって、モデル学生一人ひとりの実習の総合的な成果と過程の概要を一瞥し把握できる見通しを得た。又、集計表と照合することによって、変容の要因もある程度推測できる見通しを得た。星座グラフの表現上の特性から判断すると、実習回数を重ねると、終端ベクトルは右領域から左領域へ移る一方、目盛り軸である円弧に接近すると予測される。しかし、実際には一進一退を繰り返す予測通りではない。このような要因としては以下の

ことが推測される。

- ①意識の変容を伴う認知・思考面の変化は、技能習得と比べ測定自体が困難、且つ、同定しにくい。
- ②5 領域のうち、「学級・学校経営」「教育課程」「生徒指導」はモデル学生が関わる頻度が極めて低い。
- ③モデル学生が次第に派遣先で信頼を得ると、業務内容の質・量両面が増大する。
- ④実習の進捗状況の動向をある程度推測できる。

表 1 星座グラフのベクトルを求める計算式

$$(10 \times \text{派遣先ごとの各項目の集計件数} / (4 \text{人すべてについての} 5 \text{領域全項目の件数の最大値})) \times 0.9$$



図 2 「こらみゆ」の一事例

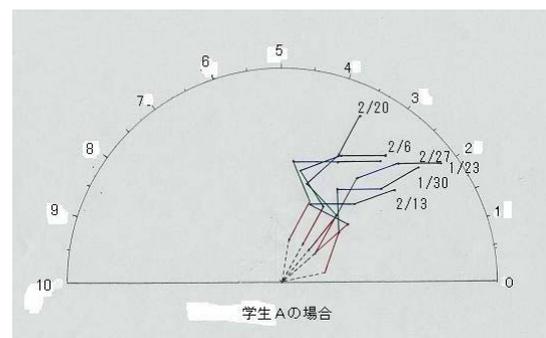


図 3 星座グラフの一事例